

第2部 トークショー 「Re-born～生まれ変わる」

モデル、タレント 佐藤 かよ

【佐藤】

皆さん、初めまして。佐藤かよです。今日は長い時間になるかもしれませんが、皆さんに私のお話を聞いていただけたらと思います。今日はよろしくお祈りします。(拍手)

今日私は皆さんの前でお話をさせていただくわけですが、私自身の体験として、もちろん男の子だったとか女の子だからとかそういうものでもなくて、本当に1人の人間として、今まで23年間生きてきた私の体験を今日は皆さんに聞いていただけたらと思います。(拍手)

ありがとうございます(笑)。リラックスして聞いてくださいね。私の言葉でもしかしたら気分を悪くされる方もいらっしゃるかもしれませんが、その辺はちょっと優しく思っただけたらと思います。よろしくお祈りいたします。

まず、私は皆さんも御存じかと思いますが、今は女性タレント・モデルとしてお仕事をさせていただいておりますが、もともと生まれたときは男の子としてこの世に生を授かりました。

私自身がよくインタビューなどで「いつ頃から女の子として生きていきたいと思うようになったのですか」とか、「いつ頃から体に違和感を覚えたのですか」とか、「生きづらいと思ったのはいつ頃からですか」という質問をよく頂くわけですが、そこには多分私とインタビュアーさんのちょっとしたギャップがありまして、私は生まれてからしばらくずっと「違和感」というものを余り感じたことがありませんでした。

幼稚園の頃に仲がいい友達はお女の子ばかりで、もちろん男の子とも仲がいいのですが、特別仲がいいのは女の子のお友達でしたし、好きなアニメは『セーラームーン』で、好きな遊びはお人形遊びだったり、そういう一般的に女の子が遊ぶような遊びを好んでしていましたし、男の子が遊ぶような遊びもしました。兄と一緒に遊んだりしたこともありますが、余り心から楽しいとは思わずに、きっと皆さんが小さいときに感じた遊んでいて「楽しい」とか、「こんな遊びがしたい」とか、「こんなおもちゃで遊びたい」というごく普通の感覚が、私の場合は女の子の遊びをするということだったので、そこに全く違和感というものは感じませんでした。

ですが、同じ幼稚園の同級生の友達のお母さんだったり、お父さんだったり、先生だったり、そういう大人の目が幼稚園児の私にも少し気が付くというか、「あれっ、ちょっと普通の子を見るような目では私のことを見ていないな」という感じを不思議なんですけど、幼稚園児ながらに感じていました。

中には、仲がよかった幼稚園のお友達が次の日になると全く口を聞いてくれなくなってしまって、私はそれがとても不思議に感じながらもどこかでその理由に気付いていて、「きっと私が女の子っぽい子だから、その友達はお母さんやお父さんに『あの子とは遊ばないように』と言われたのかな」と思ったり、実際にそういう話を耳にして居心地が余りよくないというか、自分でももちろん解決したいことですが、自分の口からそのことを告げるにはどうしても抵抗があって、そのまま何だかぎこちない友達関係を幼稚園の頃にすることがありました。

その幼稚園時代でも、仲がいい幼稚園の先生は私をすごく自由にさせてくれていましたし、周りの全ての大人が私に対して冷たい目で見ていたわけではないのですが、他人からちょっと面白がられているような、笑われているような何だか自分でも“どうしたらいいのかな…”というよく分からない感じを幼稚園のときに感じていたのを今でも思い出します。

そんな私も小学生になりまして、まず、自分の中で納得をしなければいけないと思ったのは、ランドセルの色でした。私は男の子として学校に通うことになりましたので、黒いランドセルを背負って学校に通うのは、皆さんの中では当たり前だと思いますが、私の中でその「当たり前」というもの



佐藤 かよさん

がだんだんランドセルをきっかけに「我慢しなければいけないもの」に変わっていきました。

もちろん赤いランドセルで通うことに憧れましたし、スカートだったり、ピンク色の洋服だったり、黄色い洋服だったり、青い洋服だったり、女の子の持っているお洋服を着て学校に通うことに憧れたこともあります。私もそれを自分の口から先生に言うのはとても恥ずかしいことのように感じていました。ですので、黒いランドセルを背負って学校に通うことが一般社会の当たり前。そのあたり前を受入れられないと感じる私は我慢をするしかないということを小学校の低学年のときはずっと考えたり、思ったりもしていました。

もちろん3年生、4年生になると体育の授業でクラスが分かれたり、男の子と女の子がだんだん別の授業を受けるようになってきたり、男の子と女の子の線を引くようになってきました。その頃には、ランドセルに対する我慢というものは「もうしょうがない」と思っていました。

先ほども言いましたが、親にそのことを言うのが何だか「とても恥ずかしいことだ」というのがどうしても自分の中にはありました。なかなか言葉にするのは難しいのですが、自分がそれを言うことで、「この子は女の子になりたい。そういう子なんだな」という認識で見られてしまうことがすごく嫌でした。私はその当時からきつと、ごく普通に学校に通う、ごく普通の女の子になりたいといいますが、女の子の生活をしたかったわけです。女の子になりたい男の子とごく普通の女の子というのは、自分の中にはすごく違いがあり、きつと普通の女の子は「黒いランドセルは嫌だ」なんて絶対言わないですよ。だから、そういうことをお母さんや、お父さん、お兄ちゃんに、自分の口から告げることが何か恥ずかしいことだと思っていました。

でもお母さんもお父さんもお兄ちゃんも、私のことを私よりも知っている部分は多かったと思いますが、周りの女の子友達とも仲よくしていたり、女の子の観るアニメで遊んでいたりする私を見たお父さんが、そういうことが影響して、私がどんどん女の子っぽくなっていくと思ったようで、それはお母さんが「私がちゃんと叱らないからだ」と言って、お父さんとお母さんがよくけんかしているのを聞いたり、見たりしました。

お兄ちゃんも一生懸命私を普通の男の子の感覚に戻そうとしていたのだと思います。男の子の観るアニメだったり、男の子の遊びを私と一緒にするように積極的に家族で取り組んでくれたときもありますが、やっぱり私はズレたものを直すような感覚とは違って、もともと持っている感覚だったり、思っていることとのギャップがありました。

そんな小学生の中学年のとき、それでも私は自分が同士のように仲よくできるのは女の子の友達だったので、女の子の友達と遊んでいると、学校の先生から、私一人だけが呼び出されて注意を受けました。

先生は「きつと普通の男の子は、お友達のことをまりちゃんとか、まいちゃんとか、ゆみちゃんとかって呼ばないのですよ。普通の男の子はみんな名字で呼ぶのに、何で佐藤君は女の子のこと“ちゃん”づけするの？それってすごくおかしいことだよ」と言いました。

先生が言うおかしいことが私にとってはおかしいことではなかったのですが、そこを理解するのにちょっと頭が痛くなるような感じがしましたが、私はそういう考え方が全く分からないわけではないので、先生の言っていることもものすごく分かりました。でも私が呼んでいた“ちゃん”づけの名前というのは、同士のように仲のよかった女の子の名前であって、ごく普通の呼び方の感覚でした。

その頃から急激に先生との仲も悪くなってしまっていて、「私一人が先生にとってすごく問題のある子のように見られているのかな」と自分自身でも感じ出しました。そうすると、私も余り先生との話が楽しくなくなってしまっていて、学校生活も余り……。お友達といる時間はすごく楽しいのですが、先生と一緒にいる時間がすごく窮屈になって、目が合うだけで何だか怒られているような、何だか居心地の悪いような、学校が少し楽しくなくなってしまった時期でした。

それでも周りの友達は私のことを嫌ったり、いじめたりする人はいなかったのですが、もちろん「何かちょっと変だよ」とか「オカマっぽいね」と言われたこともたくさんありましたが、みんなが「私と一緒にいると楽しい」と言ってくれて、いつも遊んでくれました。私はそういう友達が近くにいたので寂しい思いは割としなかったほうだと思います。

そんな小学校生活も終わって、私は13歳、中学校1年生になりました。中学校1年生になると、もちろん制服だったり部活だったり、より一層小学校の頃に引かれていた男女の線が濃くなってきて、

私自身もちろん学校の制服、学ランだったので、その学ランで学校に通うのがものすごく嫌というか……。今まで我慢してきたものはありますが、それ以上にすごく嫌だったので、学校に行くのが少し面倒くさくなったり、毎朝遅刻するようになっていたりしていました。

でもその頃、そんな私でも一生懸命取り組んでいたものが1つあります。ブラスバンド部、吹奏楽部に入っていたのですが、私はブラスバンドを一生懸命練習していると、今まで我慢してきたこととか、学校に行くことに関して我慢をしなければいけないものを全部忘れることができました。ですので、朝早くから練習があっても、夜遅くまで練習があっても本当に一生懸命やっていました。

部活員もほとんど女の子で、みんな私のことをある種かわいがってくれて、女の子っぽいかわいらしい男の子という感覚なのか、女の子みたいな男の子という感覚なのか、その感覚はきっとみんなそれぞれですが、みんなが本当に一緒に部活を頑張る同士として迎えてくれて、かわいがってくれて、私もとても楽しかったので、学ランを着るのが嫌だとか学校に行くのが少し面倒くさいなということを忘れながらやることができました。

それが中学2年生の頃、だんだんとドラマなど様々なメディアに「性同一性障害」という言葉が始めました。その当時私は母親からその言葉を聞いたと思うのですが、いろいろな人が「性同一性障害」についての話をし始めた時期だったと思います。

私は、初めてその言葉を聞いたとき、正直自分とは関係ないような感じがしました。何だかその「性同一性障害」という言葉が余りにも強すぎて、それを目にした私はその言葉の持っているイメージというか、重さが自分の感じている悩みだったり、嫌な経験とか忘れたいことに照らし合わせるような気持ちにどうしてもなれなくて、「まっ、そういうことがあるんだな」とある種他人事のような感じで見ていました。

そんなことがあったある日、私がいつものように部活に行くと、何だかみんながいつもとは少し違う雰囲気でした。すると、同じパートの仲がいい先輩の女の子から、「今日、実は先生から変な話をされたんだよね」と言われて、「何だろう」と思って聞いてみたら、先生は私のいないところでみんなを集めて「『みんなは知っていると思うけれども、佐藤君は病気だからみんな仲よくしてあげてね』って言われたんだよね」と言われました。

私はそれまで自分のことを病気だとか、何かが悪いとか、もちろん人とは感覚が違うのかもしれないですが、自分はそういったことを感じたことがなく、先生がどういう気持ちで「病気」といったのか分からないのですが、何だかすごくショックで、それをきっかけに部活に行く気持ちも、何だかやる気もなくなってしまい、先生と顔を合わせるのが少し気まづくなってしまって、部活を辞めました。

そして、その頃から大体将来の進路だとか、みんなが高校受験をどうするかと先生と話しているときに、「やっぱり私は先生に素直に話すことができないな」と自分でも感じていましたし、何よりこの先、自分がどうしていきたいかが全く見えなくなってしまったのです。

きっと皆さんは、将来は何になりたいかが決まらなくても、中学校3年生だったら高校受験をして高校に入って、大学に行ったり行かなかったり、そして就職をしたりしなかったりという道筋があるかと思うのですが、私はその中学校2年生のときに「このままでは私は生きていけないな」と思うようになっていました。

本当に自分の頭で考えているこの先のことがすべて真っ暗で、これからどうしていきたいか、将来何になりたいかがはっきり見えないで、自分の生きていききたい道筋が全く見えなくなってしまって、「このままでは私は生きていても楽しくないな」と思いました。

その頃、本当につまらないことが原因で、お母さんとけんかをして私は家出をしました。そのときの家出のことを思い出すと、すごく楽しいことばかりです。何で楽しいかというところ——その直前まで全く自分の将来が見えないと思っていたのに、家出をした瞬間、私は「もう女の子として生きていく」という決意をどこかで固めて、全身女の子の服で、もちろんちょっとお化粧をしたり髪の毛を結んだりし、今まで自分が我慢してきたことのすべてをやりました。

その当時、私より3つ上の仲のいい友達がいたのですが、その子のお洋服を借りたり、その子の家に泊まったりしました。その子は、私が女の子として、中学2年生の「佐藤かよ」として自己紹介をして知り合って仲よくなった、女の子として歩んだ人生の中の初めての友達だったと思います。

その家出をきっかけに私は女の子としての生活をスタートさせたわけですが、1か月、2か月すると、やっぱりお金もないですし、ずっと友達の家にもいましたし、お母さんもものすごく心配して電話やメールの着信が多かったので、正直どうしようか、帰ろうか迷いました。ですが、それまで我慢していた14年間の生活よりもたった約1か月の女の子として欲しいものがあつたら自分で着て、付けたいものがあつたら自分で付けてと、そういう当たり前の生活が自分の中でもものすごく開放的で、ものすごく楽しかったので、私は“帰りたくないな”と思っていましたが、やはりお母さんは心配しますよね。



警察に捜索願を出したことがきっかけで家に帰ることになりまして、お母さんと久しぶりに会いましたが、私は女の子の格好のまま開き直っていました。自分の中でも避けるようにしていた話ですので、それまでお母さんとは女の子として生きることについての話を深く掘り下げて話すことは余りなかったのですが、女の子になってしまった私を見たお母さんは、その容姿については一切触れずに「本当に帰ってきてくれてよかった」「生きていてくれてよかった」とそう優しく声を掛けてくれたのです。もちろんびっくりはしましたが、でもやっぱりいつかはそうなるのかなと思っていました、「私のそばにいてくれたら、もうどんな生き方をしてくれても大丈夫」と言ってくれました。そして、その日をきっかけに私はお母さんと何でも話すようになりました。

その言葉をお母さんから言ってほしかったわけではないのですが、お母さんの「どんな見た目でも、どんな格好でも、どんな生き方をしてもそばにいてくれればいい」と言ってくれたその一言で私はすごく後押しをされたというか、ある種少し距離を保ちながら見ていてくれるのかなという安心感が生まれて、その後、お母さんにはちょっとした悩みなどもいろいろ話せるようになり、それがきっかけで私はある病院に行って女の子として生きていく決意を決めて、ホルモン治療を始めました。

今、14年間の話を軽く話しましたが、思い出すと本当にいろいろなことがあって、これから話その後の約10年間をどうまとめていいのか、少し自分でも不安になりますが（笑）、大丈夫ですか、皆さん。疲れていないですか。

その家出から帰りまして、私はお化粧をして女の子のお洋服を着て、髪の毛も伸ばして女の子の生活を始めたわけですが、やはり学校に通うことはできずに、自分の中で「女の子として生きていくのだったら、もう学校は諦めるしかない」としか思わないようになりまして、それよりも私は早く社会に出たいと思うようになりました。

その頃から、友達のお母さんがオーナーとしてやっているコンビニや知り合いのお店に頼んでアルバイトを始めました。その当時、お母さんには何でも話せたのですが、自分の欲しいもの、例えば下着やメイクなどは自分のお金で好きなだけ使いたいと思っていました。

そうするには、やはり働くしかなかったのですが、その当時は女の子として生きる自分が、新しい人と出会って、その人と新しい関係を築くのがすごく楽しかったですね。

そんなアルバイト生活を送りながら、病院にも通いながらだんだん今いる私のベースがつくられていったわけですが、そんな当時でもやはりちょっとした悩みが私の中にありました。

18歳ぐらいのとき、私はいろいろなバイトの面接に行きました。接客業でも事務でもいろいろな面接に行きましたが、私にとってアルバイトをする上でなくてはならないルールが1つありました。それはお給料が手渡しで頂けるということです。

私の場合は、戸籍上は生まれ持った性別のまま記されているので、どれだけ女の子として生活しても、どれだけ周りの人には秘密にしているても、そこだけはどうしても隠せない、うそをつけない。アルバイトをするうえで、自分の銀行口座を持つことは当たり前で最低限必要なものですので、こんなお店で働きたいとか、こんなお仕事をしてみたいな、このお店は素敵だなと思ってアルバイトの面接

を受けようと思っても、最初に「お給料はどういうふうに頂けますか」と聞かなければいけなかったわけです。その質問が自分の中ですごく余計で、働きたいのに働けないわけです。

その当時、仲がいい友達には、学校に通って頑張って勉強している子もいれば、アルバイトをしている子もいましたし、彼氏と付き合っただけでちょっとムスツとしている子や、彼氏ができないと悩んでいる女の子など、いろいろな友達がいましたが、こんなことを言ったら失礼かもしれないけれども、何かみんなの悩みが自分にとってはすごく小さいことのように感じてしまったわけです。

私の場合は、いつも普通に生きていく一歩前で悩んでいました。ランドセル、学校、制服、アルバイトなど、自分の中で我慢しなければいけないのかな、諦めるしかないのかなと押し殺してきたいろいろなものが、皆さんにとっては、普通に生きている方たちにとってはごく普通の当たり前のことで、その「普通の当たり前」が自分にとっては普通の当たり前ではなくて、何だかいつもみんなの一歩前で悩んでいるような感覚がすごく嫌で、「もしかしたら、私はこのまま生きていくよりも一度死んで女の子に生まれ変わっちゃったほうが早いのかな」とだんだん思うようになりました。

そんな18歳当時、私はお洋服を売るバイトをしていたのですが、そこは知人の紹介で働いていたところでした。でもそのバイトもしばらくして、銀行口座や身分証が原因で辞めなければいけないという話になってしまったわけです。

自分としては、アパレルのお仕事をするのがすごく楽しくて、ある種ブランドを始めた頃に似ているような、嫌なことは全部忘れて人と接して、私のことを目当てに楽しみに来てくれる女性のお客さんだったり、私が前にお薦めしたお洋服を買って喜んで着てくれるお客さんに会うのがすごく楽しくて、その当時の悩みとか嫌だなどと思っていたことを全部忘れられてすごく楽しかったので、何だか辞めなければいけないとなったときにすごくふがいない、やるせないなと思いました。しかし、「全然まだできていないのに何で辞めなければいけないんだろう」と思っていたときに、ある人から声を掛けていただいたわけです。

その人はモデル事務所のスカウトの方だったのですが、「モデルのお仕事に興味はありませんか」と言われて私はスカウトされました。もちろんそのときにすぐにモデルのお仕事をしたいとは思いませんでしたし、ずっと小さい頃からモデルのお仕事をしたかったわけでもなかったのですが、正直びっくりしながらどうしようかなと思っていました。

でもやはり、アルバイトも辞めなければいけなくなってしまうましたし、そのとき掛け持ちで働いていたお友達のお母さんがやっているバーでのアルバイトも、夕方から22時頃までという短い限られた時間でお給料も少なかったもので、私は「モデルのお仕事をちょっとやってみようかな、いい経験になればいいかな」と思って始めてみることにしました。

モデルのお仕事を始めたときは、何か自分でもどうしたらいいのか全然分からなくて、もちろん撮影するときも緊張しますし、どうしたらいいのか分からなかったのですが、モデルの撮影をしているととても楽しいというか、そのときもやっぱり自分の悩みだったり、そういうものが忘れられて「自分の好きなことが今できるってすごく楽しいな」と思うようになったのと同時に、「私はいつか必ずこのモデルの仕事をきっかけに東京に出て行って頑張ろう」と思いました。

なぜかという、それまでの人生で私はほとんどやり切ったという感覚を味わったことがなかったためです。アルバイトは中途半端に自分で辞めたこともありましたが、辞めなければいけない状況になってしまったときもありました。唯一小学校は6年生まで通いましたが、中学校なんて1年生の1年間しか通っていません。それまでやり切ったことを1つとして感じたことがなかった私は、そのスカウトをきっかけにモデルという仕事で必ずやり抜いていこうという決意を、モデルを始めてから1年後ぐらいに自分の中で決めて、それからコツコツとどんな仕事でもやるようになりました。

私は名古屋出身でして、その頃も名古屋で活動していたのですが、だんだん自分の中で「うまくいっているな」と思え、仕事も増えていったりと、東京に行ったりとかそういう機会が増えていく中で、逆に自分が表に出れば出るほど、私の過去を知っている人間が私を観る機会が多くなっていくわけでした、そういう現実には少しだけ「怖いな」と思いながら、「でももしかしたら、地元の友達、同級生が観たらどう思うのだろう」とかを考えたりしながらもモデルの仕事をしていました。

その当時、私は20歳でしたので成人式もありましたが、もう成人式とか同窓会とか昔の友達に会う

場面に私は行かないようにしていました。その頃には「佐藤かよという人間はもう女の子として生きてきた」というベースがあって、友達があったので、そういう噂で私がもともと男の子だったというのを耳にしたりして友達関係が崩れるのもすごく嫌でしたし、もう別の人間として生きるようにしていたので、地元でもものすごく仲のよかった友達4～5人とは連絡をとったり、会ったりしていましたが、なるべく会わないようにしていました。

例えば、電車に乗っていて、昔の友人に会っている人たちがいて「久しぶり。3年ぶりだね。高校生以来だね」なんて話しているのがたまにうらやましく感じる時もありましたが、20歳ぐらいのときは、それはもう自分にとっては必要のないこと、諦めるしかないと思うようにしていました。

ですがやっぱりテレビに出たり、モデルのお仕事で雑誌に出たりしていると、私を見て「あの子は実は男の子なんだよ」と言う年上の先輩がいたりして、そういうことがどんどん増えていき、そのうち私の事務所の社長にそういった話が入ってしまいました。

社長から初めてその話をされたときは、私は胸に思い切りナイフを刺されたようなズキュッとしか言いようのないような、何とも言えない心の痛みを感じていて、「もうどうしよう」としか考えられないような気持ちになってしまっていました。

そのときは必死でもう「何を言っているんですか。そんなことあるわけじゃないじゃないですか」と言って必死に笑顔をつくって笑って誤魔化しました。今思うとすごく懐かしいです。でも内心「どうしよう。ここで認めてしまったら、私はモデルの仕事ができなくなっちゃうし、何としてでもこんな隠し通すしかないや」と思って、もう頭と心が全然違うことを考えながら社長に話していたことをすごく覚えてます。

そんなときに社長が「そうだよ。そんなのびっくりしちゃうよね。でも、かよがもしもそうだとしたら、僕は関係ないと思うし、もし、そういうふうな生き方をしていたとしたら、そんなかよにし出せない魅力ってきっとあると思うから全然関係ないと思うけど」と、そのとき社長はきっと軽く言ってくださったのでしょうが、私からしてみればそんなことを言われるとも思っていませんでしたし、そんな言葉を求めてもいなかったので少しびっくりしながら、ちょっと心がグラツとしながら社長との話を終えたのを覚えています。

それから家に帰って、まずお母さんに社長の耳にこういう話が入っていると、相談しました。「私のことを知っている人がどうやら社長にメールなのか、手紙なのか分からないけれども、社長に伝えてしまったみたい」と言ったら、「お母さんはいつかこんな日が来ると思っていた」と言われました。私はずっと地に足を着かない生活をしているようで、何だか薄氷の上をずっと歩いているような生活がすごく心配で、いつかそういうときが来ると思っていたようです。「でもきっとそこで本当のことを告げて、嫌ってしまう人がいたら、その人はあなたにとってそれまでの人だったんだよ。それでもあなたを受入れてくれて、応援してくれて、仲よくしてくれて、そばにいてくれる人がいたら、その人がたとえ1人でも、2人でもその人を大事にしなさい」とお母さんは言いました。

そのとき、私は友達といるのがすごく楽しかったので、その友達を失うと思うこと自体すごく嫌でしたが、そのお母さんの言葉がすごく力強く感じて、今思うと、それまでバレたらどうしようとか内緒にしなきゃいけないとか、どこか心に闇を抱えていたと思うのですが、そういう生活を送ってきた私にはすごく新しい考え方といいますか、何か背中をポンではなくて、ドーンと強く押しもらった感じがして、それからしばらく半年ぐらい悩みましたが、私は友達、そして事務所の社長に本当のことを告げることに決めました。

もちろんそのときはどうなるか分からなかったです。私にもこの先モデルの仕事が続けていけるのか、どのようになってしまうのか、それは本当に分かりませんでした。でも、私が1つだけ嫌だったのは、人からの噂だったり、人の口から伝えられてしまったことで私が築き上げた信頼だったり、友情が壊れてしまうことでした。もちろんそれは自分の中に秘密を抱えながら見繕ったつながりかもしれないですが、そういった人と人とのつながりを人からの噂だったり、そういうもので壊したくはなかったのです。

そのお母さんの言葉がずっと頭の中で回っていたこともありますが、「もうそれで嫌われてしまったら、それでいいや」という何だか吹っ切れた感じもありましたし、でもそんな私の不安とは裏腹に、

本当のことを告げた友達は、みんな「言ってくれてありがとう」と言ってくれました。

その「言ってくれてありがとう」というのが私にとってどういう言葉だったのかはすぐには分からなかったのですが、その友達は「かよちゃんが女の子だから私は仲よくしていたわけではないし、かよちゃんが男の子だから仲よくしていたわけでもないし、かよちゃんのことを好きだから友達だよ。そのことを私に言ってくれたということは、私のことをかよちゃんは大事に思ってくれていたんだね」と言ってくれて、ふだんそんなことは話さなかった友達ですが、私が自分自身の本当のこと、ずっと抱えていた胸の内を伝えたことによって、その友達も自分が思った胸の内を告げてくれて、何だかそれをきっかけにもっともっと深いつながりを持てたのかなと、すごく今まで味わったことのない人間関係をそのとき初めて私は味わいました。

そして、社長に告げたときも社長は驚いていました（笑）。本当に3秒、4秒、5秒ですか、ちょっと時間が止まってしまうぐらい驚いていましたが、その後すぐに笑って「この間も言ったけど、そんなことが原因で嫌いになったりはしないし、そんなことが原因で仕事ができなくなるというのはきつくないと思うよ。でもこの先どうするかは一緒に考えよう」と言ってくれました。

自分の中ですごく考えすぎているのかもしれませんが、私はずっと一生誰にも何も言わずに女の子として生きていくつもりでしたし、もうみんなが知らない間に戸籍も変えて普通の女の子として生きていって、それまでの14年間のことは全て捨てて1人の「佐藤かよ」という女の子として生きていくことを決めていた私が、まさかみんなに本当の自分のことを話すときが来るとはと思いませんでした。3年前になりますが、今はそのときのことを思い出すと、本当に私の場合は伝えてよかったな、言っ

てよかったなと思いました。

それから、東京に来るきっかけとなりますモデルの仕事を今後どうするかという話になったわけですが、皆さんは観てくださったか、観ていないかは分かりませんが、私はあるテレビ番組を通じて自分のことを告げることに決めました。

それはなぜかという、やはり友達だったり、近くにいる社長だったり、そういう人たちには私の言葉を直接伝えればそれで理解をしてくれますが、私はそれまで普通の女の子としてモデルの仕事をしてきたので、伝えきれないものがたくさんありました。

そして、「これから先もモデルの仕事を続けていきたい」と私の中ではそう思っていたので、それをするために誤解のないように私の思っていることを一人でも多くの人に伝えられるように、私はテレビの番組を通して、私は自分が生まれたときは男の子であったということを伝えることに決めました。

今思うと、それがきっかけで今ここにいると思うのですが、その当時収録をしたり、ロケをしたりとかいろいろな日があったのですが、当時は何も考えていなかったですね。その先どうなるかも分からなかったですし、もうモデルの仕事を続けたいという一心でした。それはきっとモデルを始めたときに決めた「私はいつか絶対東京に行って、モデルという仕事をやり通して達成させる」という自分の中で決めたことがずっと残っていたからだと思いますが、「もうモデルを続けられるなら何でもいい」と思って突っ走るようにやっていました。

そんなロケを終えて、そのテレビ番組のオンエアの日が来ました。そのときは自分の中でも何か少しやり切ったような、ちょっと心を落ち着かせて自分でも観ていたのですが、その番組が終わってしばらくすると、私のブログに多くの方からのコメントや、メッセージが届くようになりました。

そのとき、私は友達に自分のことを告げたときと同じような感覚になりました。自分の思いを伝えてみんなが自分のことをそんなふうと考えてくれるとは思っていなかったですし、私のことをみんながすごく考えてくれたというこ



とももちろんうれしかったです。皆さんが「そんなこと関係ないと思う。かよちゃんがモデルの仕事を生懸命やりたいと思っていけば、そんなことは関係ないし、頑張っしてほしい」と言ってくれる人もいたし、きっとこんなことがつらかったのかな、こんなことがあったのかな、いろいろなことがあったと思うけど、お互い会ったこともないのに私以上に私のことをすごく考えてくれる人がいるというのがすごくうれしかったです。

それをきっかけに私は東京に出てテレビのお仕事、モデルのお仕事を始めるようになりました。そして、その当時から同じ境遇で悩んでいる人たちの声も私のもとに届くようになりました。

それまで私は、同じ境遇の方とお会いすることは余りありませんでした。それはなぜかという、自分自身が自分を隠して生きてきましたし、自分のことでいっぱいだったと思います。

そのテレビ番組でのカミングアウト後、同じ境遇で悩んでいる方から「何だかかよちゃんを見る前はすごく重い病気のように悩んでいたけれども、かよちゃんをテレビで観るようになってから、私も頑張ればいつか楽しいときが来るのかなと思って頑張ります」と言ってくれるなど、そういう直接の声を聞くことは今まででなかったので「そんなふうに思ってくれるなんて…」と思いながら、私も逆にそういった同じ境遇の方がこれから先どんどん強くなっていくくれたらなと思っています。

私は何で強くなっほしいかという、もちろんその「性同一性障害」という言葉が今すごく世の中に広がっていると思いますし、例えばゲイの方だったり、レズビアンの方だったり、そういった「セクシュアル・マイノリティ」と呼ばれる言葉が今、世の中ですごく広く、世界中に広がっていると思います。

何から話したらいいのか正直分からないのですが、私の考えているものがいくつかあって、私は早くそういった「性同一性障害」という言葉がなくなればいいなと思っています。

同じ境遇で悩んでいる方がたくさんいる中でみんながみんな同じ人間ではないし、私も含めてみんながそれぞれやりたいことがあって、将来どうしていきたいかは人それぞれであって、それを「性同一性障害」という1つの言葉でまとめてしまうのは、私はどうも違うのではないかと考えています。

きっとそう思っている方もたくさんいらっしゃると思いますし、逆にいえば、今そういった理解だとか言葉だとか、そういうものが広がっている中でそういうことが理解できない、私には分からない、「それは何なの」という人が逆に時代遅れだったり、「何でそういうことを言うの」と言われてしまうことが私は逆に嫌です。

私の場合は、先ほど話しましたが、中学の先生だったり、お父さん、お母さんだったり、私のことを「ちょっとおかしいなこの子」という目で見ると人が私の周りにも何人かいました。でも私はある意味、その人たちのおかげで今があるのではないかと考えています。

本気で否定してくれて、本気できつい言葉を言ってくれて、もちろんそのときは「何で。何でそういうことを言うの」と思ったときもありましたが、そういう言葉のおかげで私はがむしゃらにでも女の子として生きていこうと思うようになりましたし、見返す、見返さないではなくて、そういう否定があったからこそ、今の私なのではないかと今すごく思っています。

ですので、きっとその偏見だったり、差別だったり、そういうものを早くなくすというよりは、その人それぞれ一人一人がどう生きていきたくとか、その人がどうなっていきたいのかという本心を聞いて理解することを進めていったほうが私はいいのではないかと今すごく思っています。

もちろん当事者の方、そういう境遇で悩んでいらっしゃる方も、ただ偏見や差別に苦しんでしまうのではなくて、逆にその偏見だったり、差別だったり、そうやって自分に対してきつく言うことを逆に利用して自分を強くしてほしいなと私は今すごく思っています。

もちろん学校だったり、職場だったり、年齢だったり、その人によって形は色々だと思います。でも私はどんな人間でも否定されたり、悪口を言われたり、否定的な意見を言われたりする人は誰でも一緒だと思います。それはこの境遇があったからとかなないからとかは関係ないと思うし、だからこそ、そういう言葉を自分の次のステップにつなげる言葉として感じて歩いてほしいなと私は思います。そういう偏見だったり、差別という、今あるものがきっと自分を次の自分に変えるチャンスなのだと思えます。

あと、今すごく問題に感じていることは、急に真面目な話になりますが、何かすごく自分の中で「ど

うしてもこれはちょっと嫌だな」と思った話をしたいと思います。

性同一性障害だったり、ゲイの方だったり、レズビアンの方だったりといろいろなセクシュアル・マイノリティの方がたくさんいらっしゃると思いますが、私はどんな見た目だったり、どんな体になっても自分自身を強くして行ってほしいし、やっぱり今の世の中、すごく安易に簡単にホルモン治療ができてしまったりする病院もあると聞いたことがあります。

この間会った方は、自分が女の子になりたいわけではないし、自分は男の子として女の子が好きなのだけど、女の子の格好がしたいと。でも自分でもよくわからないけど、女性ホルモンは打っているという方がいました。私はその方に「病院に診てもらったんですか。どうしたいか相談したのですか」と言ったところ、「診てもらっていない。病院に行って自分を診たら、その先生が『あっ、ホルモン注射ね』と言ってすぐに注射を打ってくれた」と言っていました。

私はもちろんそのとき注射を打てば、少し心が落ち着くかもしれないし、見た目的に女の子らしくなってよかったと思うかもしれないけれども、そこはやはり体のこともあるので、もっとちゃんと自分のことを大事に考えてほしいので、まずは相談して自分が——私の場合は女の子として生きていくということですが——そう生きていくことに従うパートナー、先生をきちんと見つけてほしいなと思います。

やはり手術をするから女の子になるとか、手術をするから男の子になるとか、手術をしたから女性、手術をしていないから男性とかそういうことだけではなくて、顔を整形したから、整形していないからとかそういうことではなくて、もっと心の中で自分がどうしていききたいか、どう生きていききたいかということを当事者の方には感じてもらいたいなと思います。

もうかなり長い時間話したので、そろそろ将来の話をしたと思います。東京に出てきて3年、いろいろなことがありましたし、いろいろな仕事をしてきました。でもやはり私はモデルのお仕事を始めたときに、最初に決めたモデルのお仕事をこれからも続けていきたいですし、その仕事をするによって、私にはある夢があります。それは将来日本だけではなくて海外に行って仕事をしたいと思っています。

なぜかという、日本でもそうですし、海外などでもそうですが、言葉が通じない中でも価値観は人それぞれだと思います。でもきっと人が目で見て感じるもの、そのモデルという仕事で、たとえ自分の名を伏せてでもその仕事をやって評価されたときに、きっとそれは私の境遇、もともと男の子で生まれてきた私が女性として、モデルとして1つの評価を得られればいろいろな理解につながると思いますし、いろいろな可能性を広げていけると私は感じています。

やっぱりカミングアウトした後にすごく感じたのは、それまで何も言わなかった人が今の私を見て「やっぱりかよちゃん、こういうところが男っぽい」とか「やっぱりこの人はもともと男だったからね」という見方で見られることは、きっとこれから先も多々あると思います。

でも私は「そんなこと関係ない」と思っていますし、それはやっぱり自分の胸の内を伝えて、今本当に自分の思っていることが発言できて、自分のやりたい将来の夢というものが見つかったからだと思います。

もちろん同じ境遇も含めて、こういう悩みも含めてかとは思いますが、私はそれだけではなくて、たとえ身体的に障害があっても、知的に障害があっても、何か病気を持っていたとしても「そんなこと関係ない」と言えたり——私はもともと男の子として生まれてきて女性のモデルをやるということが「きっと世界を変える」という感覚になるのであれば、私はそれは逆にそういう可能性、何ていうのでしょうか。そういう人が持っている“当たり前なこと”だったり、“ごく普通”というものを私はこれから先も変えていきたいと思っています。

大丈夫ですか、皆さん（笑）。長かったかな。私も何かこんなにたくさんの方の前で自分の話を1時間もさせていただく機会というのはなかなかなかったですし、もう汗だくになりながら何を話しているかも分からないながらに、本当に思い出すとどんどん言葉が出てきてしまって、どう説明をつけないか分からなくて、もう全然うまく話せたのかも分からないのですが、それだけ私の24年間はいろいろなことがあって、何かいろいろな思いがあったのですが、でもそれを今こうやって皆さんの前で話せるということは、きっと皆さんが私のことを受入れてくれているといえますか、応援してくれて

いて、見ていてくれるおかげだと私は感じています。

本当に今言えるのは——もちろん死にたいと思ったこともあるし、もう逃げたいと思ったこともあるけど、でも一度隠した自分を、本当のことをみんなの前で自分の口で伝えることができ、本当によかったなと今、心の底から思っています。

何だか長い話になってしまいましたが、同じ境遇で悩んでいる方だったり、その親御さんだったり、その周りの人だったり、そういったことを理解しようと思っている人がもっと本音で語れる社会になっていくために、私も頑張っていきたいですし、皆さんも少し今日の私の話で考え方が広がったり、いろいろな見方ができるようになったら、私は今日話してよかったなと本当に思います。ありがとうございました。(拍手)



会 場 風 景